

古墳時代における軍事組織について

The Archaeological Analysis of Military Organization in the Kofun Period

田中晋作

はじめに

- ①古墳時代前期後半における軍事目的の変化
- ②常備軍成立の可能性について
- ③武器の副葬に特化した古墳の出現
- ④古墳時代前期後半から中期における軍事組織の特質

【論文要旨】

今回のシンポジウムで与えられた課題は、古墳時代の軍事組織についてである。小論の目的は、この課題について、今までに提示してきた拙稿をもとに、とくに、古墳時代前期後半から中期を対象にして、①古墳時代前期後半以降にみられる軍事目的の変化、②中期前半に百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団による常備軍編成の可能性、③中期における軍事組織の編成目的について検討し、つぎの私見を示すことである。

前期後半、それまでの有力古墳でみられた示威や防御を目的とした武器が、一部の特定古墳で具体的な武装形態を反映した副葬状況へと変化する。この変化は、既存有力古墳群でみられるものではなく、この段階で朝鮮半島東南部地域の勢力とそれまでにない新たな関係を結んだ新興勢力の中に現れるものである。

中期に入り、百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団によって、形状および機能が統一された武器の供給がはじまり、大規模な動員を可能とする基盤が整えられる。この軍事組織の編成を保障するために、両古墳群の被葬者集団の特定の人物もしくは組織のもとに、人格的忠誠関係に基づいた常備軍が編成される。

さらに、武器の副葬が卓越する一部の古墳で、移動や駐留を可能とする農工具を組み込んだ新たな武器組成が生まれる。このような武器組成は、国内に重大な軍事的対峙を示す痕跡が認められないことから、計画的で、遠距離、かつ長期間にわたる軍事活動を視野に入れた対外的な組織の編成が行われていたことを示すものである。

以上の検討結果によって、古墳時代前期後半以降にみられる軍事組織の編成は、政治主体が軍事力の行使によって解決を必要とした課題が、それまでの対国内的な要因から、朝鮮半島を主眼とした対外的な要因へと変化したことを示していると考えられる。

はじめに

今回のシンポジウムで与えられた課題は、古墳時代の軍事組織についてである。小論では、この課題について今までの拙稿を総合し、とくに、古墳時代前期後半から中期における武器および軍事組織に関して私見を示す。内容、記述において一部拙稿と重複する部分や、紙面の関係から十分な論拠を示すことができない部分もあるが、日本の古代国家成立過程において軍事が果たした役割を明らかにするための準備作業のひとつとしたい。

さて、小論では、武器および軍事組織について、つぎの視点をもって考える。

まず、武器は、それぞれの時代における最新の技術と知識の集約によって生み出されてきたものであり、同時に、新たな機能を備えた武器の導入によって、常に機能更新が図られてきたものである。つまり、武器の研究は、それぞれの時代における最新の技術水準を明らかにすることにはじまり、武器の製品としての導入や開発・生産体制の確立と維持、さらには、その需給関係に垣間見られる政治的関係にまで及ぶことができるはずである。

また、武器の機能向上の速度や生産量、また、城塞等の防御施設の推移は、それぞれの時代における社会状況を窺い知る上で重要なバロメーターとしての役割も果たしている。社会が戦争状態もしくはそれに類する緊張状態に置かれていたとすれば、武器の機能向上の速度が上がり生産量も必ず増大するとともに、城塞等の防御施設が拡充されるはずである。逆に、社会が安定した状態にあるならば、武器の開発、生産スピードが減速し、防御施設の拡充が停滞することになる。

さらに、どのような装備と構成のもとに編成された軍事組織が存在したかを明らかにすることは、その軍事組織がどのような目的のもとに編成されたものであったかを解明する上で重要な手がかりになる。つまり、軍事組織の解明は、これを編成する政治主体が、軍事力の行使によって解決を必要とした課題がどのようなものであったかをある程度絞り込むことができる可能性を秘めている〔下向井1987〕。これらの視点はすでに一般化した定理といってもよい。

なお、以下の検討で対象とする武器は、すべてが古墳に副葬・埋納されていたもので、必然的に葬制という制約を受けることになる。また同時に、古墳に副葬・埋納された武器をはじめとするさまざまな物品は、ある意味では廃棄されたものである。しかし、当時の葬制にともなった副葬・埋納行為は、無作為にではなく、一定の規範に則って行われていたと考える。つまり、武器に関していえば、その所有・管理形態また武装内容が、正確にとまではいわないまでも、副葬・埋納状況に何らかの形で反映されていると考⁽²⁾えている。

さて、このような視点に基づいて、畿内およびその周辺地域を対象に、つぎの3点について検討したい。

まず一つ目は、古墳時代前期後半以降にみられる軍事目的の変化について、二つ目は、中期前半に百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団のもとに常備軍が編成されていた可能性について、三つ目は、中期における軍事組織の編成目的についてである。

ところで、古墳時代の武器の推移は、基本的にはその系統、構造、機能、組成が中国東北部地域、朝鮮半島、日本列島という広範な地域で同質化していく過程を示していると考えられる。より優れた武

器の導入、開発によって、具体的には、挂甲や長頸式鉄鏃、鉾や長刀の採用によって、それぞれの地域が独自にもった実用武器や武器組成、また、これに基づいて編成された軍事組織が淘汰、更新されていく過程を示しているといってもよい。これはひじょうに重要な現象であると考えられる。つまり、この広範な地域ではいくつかの政治勢力の盛衰が繰り返される中で、共通した武器とこれによって武装する軍事組織が、導入時期の早遅やそれぞれの地域が担った役割によって組成や編成が異なるとはいえ、基幹部分では同質化していくというひとつの世界を形成していると考えられる [田中 2001b]。

①……………古墳時代前期後半における軍事目的の変化

前期後半における軍事目的の変化を、方形板革綴短甲を含む新たな武器組成の出現という現象から検討する。

まず、この段階における武器組成の変化を明確にするために、それまでの武器の副葬について簡単に触れておきたい。

前期における武器の副葬は、奈良県ホケノ山古墳の段階に大きな変革を迎え、その後は、基本的にはその延長線上で推移すると考えている。ホケノ山古墳では、盗掘を受けていたが、素環頭大刀を含む刀 2、剣 6 以上、銅鏃 73 以上、鉄鏃 75 以上が出土している。ホケノ山古墳でみられた武器の副葬は、威信財としての武器の存在を否定するつもりはないが、弥生時代後期から終末にみられたように、刀剣を上位に置いた武器の副葬から組成として整った武器の副葬へという、武器の副葬の本質がこの段階で転換を迎えたことを示している。ただし、銅鏃の形状からみて、広義の大和古墳群ないしは大和盆地東南部地域に、ホケノ山古墳に先行して、ホケノ山古墳でみられるような新たな武器組成の副葬がはじまっている可能性を想定しておく必要がある。

さらに、ホケノ山古墳に続く武器組成として良好な資料が奈良県黒塚古墳で得られている。黒塚古墳では、素環頭大刀を含む刀剣を中心に、ホケノ山古墳では認められなかったヤリ・鉄製防御用武器、可能性として盾を含むより充実した武器組成と武器の副葬量の増大がみられる。ただし、黒塚古墳は広義の大和古墳群における大型主墳ではなく、相対的に規模が劣る主墳、中型主墳の位置にあることは注意を要する。

また、前期前半に出現したこのような武器組成は、黒塚古墳をはじめ京都府椿井大塚山古墳・同元稲荷古墳・兵庫県西求女塚古墳など特定地域の有力古墳に限られたものであって、畿内およびその周辺地域にあっても必ずしも敷衍化したものではない。現状では、ホケノ山古墳以降にみられる新たな武器組成の導入、また、これに続く武器組成の充実と武器の副葬量の増大は、広義の大和古墳群ないしは大和盆地東南部地域の勢力の主導のもとで行われたと考えてよさそうである [田中 2002]。その後、この傾向は奈良県メスリ山古墳などにみられるように、大和盆地を中心に各地域の特定有力古墳に広がる。

ところで、小札革綴冑や素環頭大刀を含む刀は、安保協定にもとづいて魏から供与された兵威のひとつであるという考えが示されている [岡村 1999]。事例は限られているが、一部有力古墳にみられる整った武器組成や武器の副葬量の増大という現象に対する有効な解釈のひとつであると考え

る。つまり、特定の中核的な勢力による武器の製品としての継続的な導入とその意図による供給が想定できるのではなかろうか。

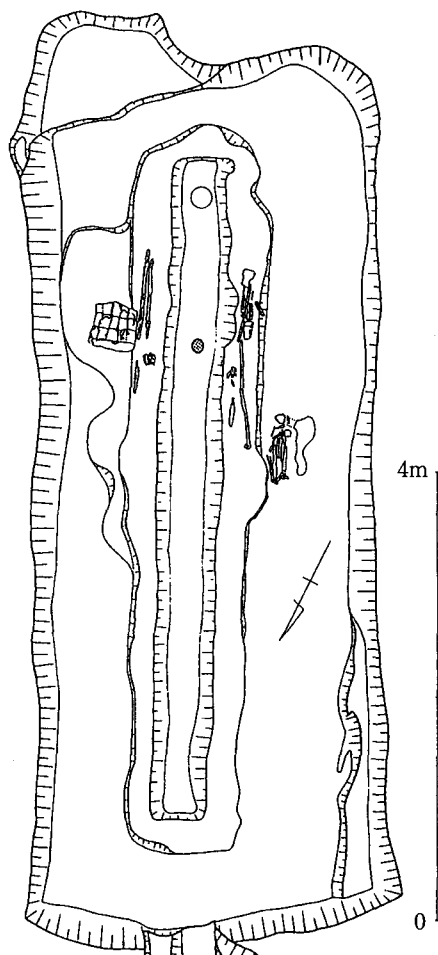
しかし、これらの古墳でみられる銅鏃や鉄鏃、また、ヤリに関しては、製品としての導入から除かれている。ホケノ山古墳で出現する新たな武器組成に関していえば、外来的な要素との複合によって成立したものといえる。また、近年の朝鮮半島での調査成果からすると、小札革綴冑などについても、中国系譜といういい方はできても、魏からという限定には柔軟性をもたせておく必要がある。

いずれにせよ、一部の有力古墳でみられるこのような整った武器組成の導入や武器の副葬量の増大は、この段階が特定の勢力にとって多量の武器の保有を必要とした社会情勢にあり、それを可能としたのが広義の大和古墳群ないしは大和盆地東南部地域の勢力であったと考えたい。しかし、これら一部有力古墳でみられる武器の出土状況は、武装形態を複数単位副葬するものではなく、とくに攻撃用武器にあっては、その備蓄を反映した副葬であると考えられる。これらの古墳に副葬された武器は、抑止を目的とした軍事的優越による示威、また、防御的な使用を目的としたものであると考える [田中 2002]。

さて、このような状況が大きく変化するのが、前期後半の段階である。現在のところ事例が大和地域に限られるが、タニグチ1号墳や上殿古墳、また、鴨都波1号墳や城山2号墳で、武装形態を単位とした副葬がみられるようになる。小規模な古墳でありながら、他地域ではみることができない卓越した武器が副葬されている [西藤 1996]。このような副葬状況は、それまでの、また、同時期の奈良県東大寺山古墳や同マエ塚古墳でみられるような特定の武器の多量副葬ではなく、これを所持した古墳被葬者がそれまでにない具体的な軍事活動を想定しないしは必要とした武装形態の存在を示しているものと考えられる。このような現象を軍事目的の変化としてとらえたい。

この変化の背景を探るために、前期後半に出現する方形板革綴短甲に注目して検討する。

方形板革綴短甲は、出土数が全国で17例とひじょうに限られた古墳副葬品であるが、その分布は、畿内およびその周辺地域を中心に九州から関東までの広がりをもっている。この短甲でもっとも注目される点は、現在のところ畿内の既存有力古墳群からの出土例がなく、また、特定古墳群や地域に集中するという現象が認められないことである。



第1図 タニグチ1号墳遺物出土状況
(報告書タニグチ1号墳 一部改変)

ところで、樺井大塚山古墳や滋賀県雪野山古墳にみられるように、方形板革綴短甲が出現する以前から、小札革綴冑という鉄製冑の存在が知られている。前期前半に出現し、方形板革綴短甲と同様、中期までにはその姿を消している。この冑も出土数が全国で13例と、たいへん限られた副葬品のひとつである。ただ、方形板革綴短甲とは対照的に、小札革綴冑は現在のところ長野県有明山將軍塚古墳と福岡県石塚山古墳を除いて、畿内およびその周辺地域に分布するという違いがある。また、相対的な比較であるが、小札革綴冑が出土する古墳が方形板革綴短甲を出土する古墳よりも規模が大きいという違いも指摘されている [橋本 1998]。

ところが、基本的な構造の違いがあるとはいえ、小札革綴冑と方形板革綴短甲は前期後半には併存しながら、前期後半の瓦谷1号墳を除いてセットになって出土するという事例がない。つまり、方形板革綴短甲で武装する勢力は鉄製冑をもたず、一方、小札革綴冑で武装する勢力は鉄製甲をもたなかったということになる。これは既述したように、小札革綴冑が中国系譜の冑で製品としてもたらされたもので、一方の方形板革綴短甲は、別系統の甲としてもたらされたもの⁽⁴⁾ないしは、この考えは採らないが、国内で生産されたもの⁽⁵⁾という違いによるのかもしれない。

このような現象について、現在大きく二つの解釈がある。一つは、小札革綴冑が方形板革綴短甲よりも相対的に規模が大きい古墳から出土するという点に注目して、身分の格差によって武装形態が異なったのではという解釈 [橋本 1998]。もう一つは、小札革綴冑で武装する勢力と方形板革綴短甲で武装する勢力が異なっていたのではないかという解釈である [田中 2001a]。

小論は後者の立場に拠っており、前期後半段階には、少なくとも畿内およびその周辺地域に異なる武装形態が併存する。言葉を換えると、小札革綴冑をもつ既存勢力が、方形板革綴短甲という新たな甲で武装する勢力の出現を許容する、ないしは押し止めることができない状況があったと考える。同じように古墳を造りながら、ある部分で相容れない複数の勢力が併存していた可能性が想定される。

さらに、この違いを明確にするため、前期半ばないし後半から中期前半に集中する筒形銅器と巴形銅器を手がかりにして考えてみたい。

筒形銅器は、現時点で約70の存在が知られ、出土地不詳というものを除くと、畿内およびその周辺地域を中心に42古墳から出土し、東は埼玉県から西は熊本県までの分布がみられる。一方の巴形銅器は、23古墳1住居址から出土しており、その分布は筒形銅器同様、畿内およびその周辺地域を中心に、東は神奈川県から西は福岡県までの広がりをもっている。ところが、両者はほぼ同時期に併存しながら、現在のところ大阪府交野東車塚古墳を除いて、一つの古墳で共伴する事例がない。この現象については、巴形銅器は筒形銅器に比べ相対的に規模が大きな古墳から出土する傾向にあることが指摘されている [福永 1998]。しかし、筒形銅器や巴形銅器は既存有力古墳群での出土が知られておらず、その分布が畿内およびその周辺地域を中心とするとはいえ、特定の地域や古墳群で集中しないしは継続して副葬されるという状況にないことは見逃せない現象である。奈良県池ノ内5号墳や京都府尼塚古墳を除き、そのほとんどがこの段階以降に台頭する新興勢力によって所持されたものであるといえる。

ところで、近年朝鮮半島東南部地域で筒形銅器や巴形銅器の出土が相次ぎ、日本列島の古墳との併行関係、また、勢力間の相互関係を直接検討することができる資料として注目されるようになっ

第1表 畿内およびその周辺地域の鉄製甲冑・筒形銅器・巴形銅器・三角縁神獸鏡共伴関係一覧

| No. | 古墳名 | 所在地 | 墳丘形態 | 規模(m) | 鉄製甲冑 | 筒形銅器 | 巴形銅器 | 三角縁神獸鏡 |
|-----|-----------|----------|--------|-------|--------------------------------------|--------|------|--------|
| 1 | 安土瓢箪山古墳 | 滋賀県安土町 | 前方後円墳 | 162 | 方形板革綴短甲 | ● | — | — |
| 2 | 雪野山古墳 | 滋賀県八日市町 | 前方後円墳 | 70 | 小札革綴冑 | — | — | ● |
| 3 | 大塚越古墳 | 滋賀県栗東市 | 前方後円墳 | 82 | 小型三角板革綴短甲 | — | ● | — |
| 4 | 石山古墳(中央標) | 三重県上野市 | 前方後円墳 | 120 | 小札革綴冑 | — | ● | ○(推定) |
| 5 | 園部垣内古墳 | 京都府園部町 | 前方後円墳 | 82 | 方形板革綴短甲 | — | — | ● |
| 6 | 穴太古墳群 | 京都府亀岡市 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 7 | 黄金塚2号墳 | 京都府京都市 | 前方後円墳 | 80 | 小札革綴冑 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 8 | 妙見山古墳 | 京都府向日市 | 前方後円墳 | 100 | 小札革綴冑(後円部) | — | — | ●(前方部) |
| 9 | 鳥居前古墳 | 京都府大山崎町 | 前方後円墳 | 50 | 三角板革綴短甲 | — | ● | — |
| 10 | 尼塚古墳 | 京都府城陽市 | 方墳 | 40 | — | ● | — | — |
| 11 | 美濃山王塚古墳 | 京都府八幡市 | 円墳 | 60 | 豎矧板革綴冑・三角板革綴衝角付冑 三角板革綴短甲・長方形板革綴短甲 | ● | — | — |
| 12 | 椿井大塚山古墳 | 京都府山城町 | 前方後円墳 | 169 | 小札革綴冑 | — | — | ●(前方部) |
| 13 | 瓦谷1号墳第1主体 | 京都府木津町 | 前方後円墳 | 50 | 小札革綴冑・方形板革綴短甲 | — | — | — |
| 14 | 将軍山古墳 | 大阪府茨木市 | 前方後円墳 | 107 | 方形板革綴短甲 | — | — | ○(推定) |
| 15 | 紫金山古墳 | 大阪府茨木市 | 前方後円墳 | 100 | 豎矧板革綴短甲 | ● | — | ● |
| 16 | 交野東車塚古墳 | 大阪府交野市 | 前方後円墳 | 65 | 三角板革綴衝角付冑・小型三角板革綴襟付短甲 | ● | ● | — |
| 17 | 忍岡古墳 | 大阪府四条畷市 | 前方後円墳 | 90 | 小札革綴冑 | — | — | ● |
| 18 | 津堂城山古墳 | 大阪府藤井寺市 | 前方後円墳 | 208 | 小型三角板革綴短甲 | — | ● | — |
| 19 | 盾塚古墳 | 大阪府藤井寺市 | 帆立貝形古墳 | 73 | 三角板革綴衝角付冑 三角板革綴短甲・長方形板革綴短甲 | ● | — | — |
| 20 | 玉手山5号墳 | 大阪府柏原市 | 前方後円墳 | 75 | — | — | ● | — |
| 21 | 玉手山6号墳 | 大阪府柏原市 | 前方後円墳 | 70 | 小札革綴冑 | — | — | — |
| 22 | 和泉黄金塚古墳東塚 | 大阪府和泉市 | 前方後円墳 | 85 | 三角板革綴衝角付冑・小型三角板革綴短甲 | — | ● | ● |
| 23 | 久米田貝吹山古墳 | 大阪府岸和田市 | 前方後円墳 | 130 | 小札革綴冑 | — | — | — |
| 24 | 富雄丸山古墳 | 奈良県奈良市 | 帆立貝形古墳 | 86 | 短甲 | — | ● | ● |
| 25 | 上殿古墳 | 奈良県奈良市 | 円墳 | 23 | 方形板革綴短甲 | — | — | — |
| 26 | 東大寺山古墳 | 奈良県天理市 | 前方後円墳 | 140 | — | — | ● | — |
| 27 | 黒塚古墳 | 奈良県天理市 | 前方後円墳 | 132 | 小札革綴冑(推定) | — | — | — |
| 28 | 斑鳩大塚古墳 | 奈良県斑鳩町 | 円墳 | 35 | 三角板革綴短甲 | ● | — | — |
| 29 | 佐味田宝塚古墳 | 奈良県河合町 | 前方後円墳 | 112 | 甲冑 | — | ● | ● |
| 30 | 城山2号墳 | 奈良県香芝市 | 円墳 | 20 | 小札革綴短甲 | ● | — | — |
| 31 | 寺口和田13号墳 | 奈良県新庄町 | 円墳 | 50 | — | — | ● | — |
| 32 | 鴨都波1号墳 | 奈良県御所市 | 方墳 | 20×14 | 方形板革綴短甲 | — | — | ● |
| 33 | 西浦古墳 | 奈良県御所市 | 円墳 | 24 | — | ● | — | — |
| 34 | 新沢500号墳 | 奈良県橿原市 | 前方後円墳 | 62 | 方形板革綴短甲 | ● | — | ● |
| 35 | 池ノ内5号墳 | 奈良県桜井市 | 円墳 | 15 | 長方形板革綴短甲(第1棺) | ●(第3棺) | — | ●(第2棺) |
| 36 | タニグチ1号墳 | 奈良県高取町 | 円墳 | 20 | 方形板革綴短甲 | ● | — | — |
| 37 | 谷畑古墳 | 奈良県榛原町 | 円墳 | 27 | — | ● | — | — |
| 38 | 大墓古墳 | 奈良県五條市 | 不明 | 不明 | 方形板革綴短甲 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 39 | 西求女塚古墳 | 兵庫県神戸市 | 前方後方墳 | 95 | 小札革綴冑 | — | — | ● |
| 40 | 岩橋千塚古墳群 | 和歌山県和歌山市 | 不明 | 不明 | 不明 | ● | 不明 | 不明 |

た。

筒形銅器は、2000年時点で58の存在が知られ、ほぼ日本列島に匹敵する量に達しているが、一方の巴形銅器は、3古墳9点に留まっている。また、筒形銅器は釜山市福泉洞古墳群や金海市大成洞古墳群など洛東江下流域に集中し、特定の古墳群で継続した副葬がみられる。一方の巴形銅器は大成洞古墳群以外での出土が知られていない。このように朝鮮半島での筒形銅器と巴形銅器は、日本列島と対照的なあり方をみせている。

筒形銅器と巴形銅器の製作地についてはさまざま議論があるが、拙稿では、⁽⁶⁾少なくとも筒形銅器については、朝鮮半島東南部で製作されたかあるいは、同地を経由してもたらされた可能性を考えている[申敬澈1993、鄭澄元・洪潜植2000]。筒形銅器と巴形銅器の出現は、前期半ばないし後半以降、少なくとも畿内およびその周辺地域の特定の勢力と朝鮮半島東南部地域の勢力との間に、それまでになかった新たな関係が生まれたことを示していると考えられる[田中1998・2000]。

さて、ここで注目したい点は、筒形銅器や巴形銅器が、第1表に示したように、多くの場合方形板革綴短甲やこれに続く初期の定型化した甲冑と共伴するという現象と、既述したように、既存有力古墳群からの出土が現在のところないという現象である。むしろ、筒形銅器や巴形銅器が副葬されていた古墳に必ず方形板革綴短甲や初期の定型化した甲冑が伴うというわけではなく、あくまでもひとつの傾向として認められる現象である。

牽強付会との批判を受けるかもしれないが、方形板革綴短甲や初期の定型化した甲冑は、筒形銅器や巴形銅器を手がかりにすると、製品として朝鮮半島東南部地域かあるいは同地を経由してもたらされた可能性が高いと考える。

以上の検討から、前期後半にそれまでになかった武器や具体的な武装を反映した副葬状況が、既存有力勢力の中ではなく、この段階に台頭する新興勢力の中に、朝鮮半島東南部地域との関係を背景にして出現したものと考える。しかし、少なくとも形状が類似した銅鏃が小札革綴冑とも方形板革綴短甲とも共伴する事例が一定数知られており、それまでの組成を払拭する新たな武器組成として導入されたとまではいえそうにない。つまり、方形板革綴短甲を機軸にして考えると、前期の早い段階から続く三角縁神獸鏡の所持、副葬によって象徴される勢力や前期後半以降強勢を誇った佐紀古墳群西群の勢力以外に、この段階になって朝鮮半島東南部地域の勢力と密接な関係を背景に新たに台頭した勢力が併存した可能性が考えられる。

朝鮮半島東南部地域の勢力との関係を背景にして、第1表に示した古墳被葬者の一部に、具体的な軍事活動に対応できる武装形態をもった勢力が出現したと考える。

②……………常備軍成立の可能性について

中期に入ると、長大な刀剣の一般化、鉾や盾の増加、鉄鏃の大型化、そして定型化した甲冑の出現と、それまでの武器組成がさらに大きく変化する。この変化は、新たな機能を備えた武器の製品としての導入、開発、生産の中核を担った新興主導勢力である百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団が各地の勢力に武器を供給したことによって生じた現象であると考えられる。定型化した甲冑を手がかりにしてみると、西日本を中心に各地でこのような新たな武器組成をもつ古墳が出現し、また、小規

模古墳が占める割合が高まり、とくに、その多くが三角縁神獣鏡の分布と重複しないことは重要である。その供給が各地の既存有力勢力ではなく、中期を境に台頭する新興勢力を対象にしたことを示している。さらにいえば、両古墳群の被葬者集団によって台頭を促された勢力であったといってもよい [田中 2001a]。

また、定型化した甲冑の量は、現状ですでに前期の甲冑の数十倍に達し、また、甲冑や鉄鍬にみられる急激な変化は、当時の社会が武器の製品としての導入、さらに、開発、生産を急務とした状況下におかれていたことを示している。形状および機能が統一された武器による武装が、軍事組織の編成上もっとも重要な要件のひとつであるということを勘案すれば、中期に大規模な軍事組織の存在を想定する条件が整ったものと考えられる。

つぎに、その中核を担った常備軍の存在を想定し、定型化した甲冑を含む武器の出土状況を手がかりにして検討してみたい。

さて、定型化した甲冑を含む卓越した武器の副葬・埋納がみられる古墳では、その出土状況にいくつかの違いがある。

まず示す事例は、大阪府桜塚古墳群大塚古墳第2主体部東柳の出土状況である。ここでは、古墳被葬者がもつ武器組成3単位が副葬されていたと考える。その構成は、

北群 甲冑1組・刀2・剣1・刀子1・(ヤリ1)

中央群 甲冑1組・刀4・剣3・刀子1・(ヤリ1)

南群 甲1・刀4・剣3・刀子1・(ヤリ1)

である。鉄鍬の副葬はみられなかったが、ヤリは棺外東側に沿って2、対する西側に同様に1が配されており、棺内に副葬された3単位の武器組成に対応するものと推定して付加した。また、武器組成3単位の中にそれぞれ刀子が1ずつ含まれており、後述するように、これを工具としてではなく、武器組成の中に組み込まれたものと考えている。第2表に示したように、大塚古墳に続く御獅子塚古墳においても類似した武器組成がみられる。甲冑1に対して複数の刀剣、ヤリや鉾の長柄の武器、数群までの鉄鍬といった武器組成が、定型化した甲冑が副葬された古墳の多くで共通して認められる。

ところが、大塚古墳第2主体部東柳のような武器組成を採らないひじょうに特殊な古墳が存在する。そのひとつが大阪府古市古墳群野中古墳である。野中古墳では、武器を中心とする埋納品が5列に分割された状態で出土した。第1列では甲冑10・刀剣11、第2列では甲冑1・刀1・鉄鍬約630・刀子3・鉾12、鍬先11+形状(後述の第5列出土数を含む)・鎌2・鉾破片10・錐状鉄製品破片38、第3列では鉄鍬約110・石臼1・石杵1、第4列では原位置を動かされた刀約150・剣13・鉾・鉄鋌多数・斧30、第5列では鍬先・U字形刃先4+・手鎌8+・鑿状鉄器2・刺突具2・鉾破片6・錐状鉄製品破片7が検出されている。

この出土状況でもっとも注目したい点は、第1列と第2列に配された甲冑とそれぞれの甲冑に帰属するかのようにならされていた刀剣1の存在である。甲冑と刀剣は、それぞれ11と12になっており、厳密には整合しないが、第4列に多量の刀剣が置かれていたにもかかわらず、これらの刀剣12だけが甲冑に付随するという特殊な扱いを受けている。だからといって、これらの刀剣が、外装などによって他の大多数の刀剣と区分できるものではない。さらに、第2・3列に置かれた12群

で構成された鉄鏃についても甲冑の数量と関連するものと考える。

このような武器組成の特異性をさらに強調するために、大阪府黒姫山古墳前方部竪穴式石室での状況をあげたい。黒姫山古墳前方部竪穴式石室では、甲冑 24 とその付属具以外に刀 14 ・ 剣 10 (以上) ・ 鉾 9 ・ 鉄鏃 56 ・ 刀子 5 などの武器が埋納されていた。ここでも、甲冑と同数の刀剣が埋納されている。しかし、出土状況は野中古墳と異なり、それぞれの甲冑に刀剣が1ずつ帰属するような状態ではなく、石室内の数カ所に複数で置かれていたと報告されている。また、鉄鏃は石室全体から出土しており、鉾を含め野中古墳の第 1~3 列の状況とは異なっている。

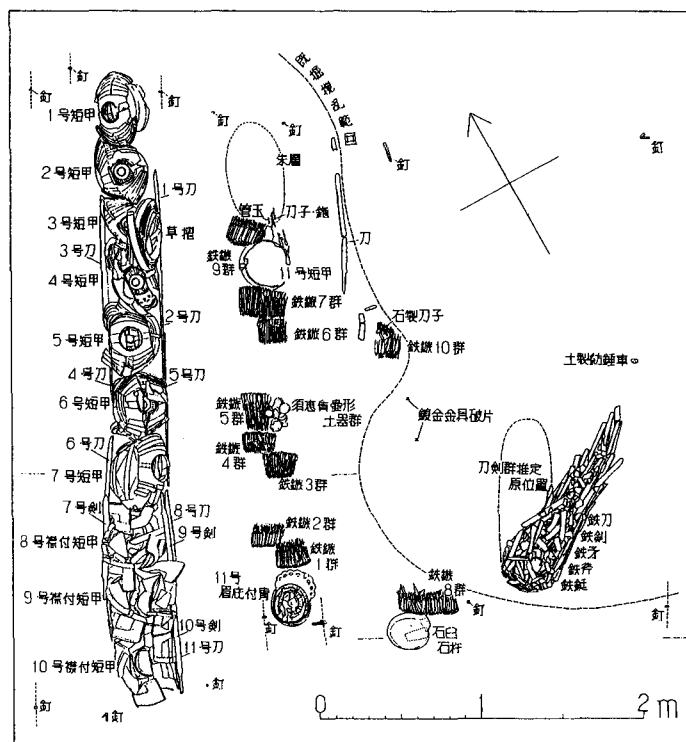
現在のところ、このような武器の出土状況は、野中古墳 (第 1~3 列) と黒姫山古墳前方部竪穴式石室でしか確認されていない。ただし、その可能性が高い古墳として、大阪府百舌鳥古墳群七観古墳⁽⁷⁾をあげることができる。対象となる古墳が古市古墳群と黒姫山古墳、可能性として百舌鳥古墳群に限られていることは重要な現象であると考えられる。

一方、大塚古墳第 2 主体部東柳とも野中古墳とも異なる武器組成が大阪府淡輪古墳群西小山古墳でみられる。西小山古墳では、甲冑 3 ・ 刀 27 ・ 鉾 2 ・ 鉄鏃 107 が出土しているが、野中古墳のように甲冑 1 に対して単数の刀剣・鉄鏃 1 具といった組成ではなく、また、大塚古墳のように甲冑 1 に対して複数の刀剣や長柄の武器、数群までの鉄鏃といった組成でもない。このような組成は、中期前半の京都府久津川車塚古墳など限られた古墳でみられるものである。

ところで、野中古墳のように武器の埋納を主眼とする「陪塚」には、甲冑を含まないが多量の攻撃用武器が埋納された「陪塚」が存在する。たとえば、古市古墳群アリ山古墳では、刀 77 ・ 剣 8 ・

鉾 52 ・ 剣 8 ・ 鉄鏃 1,612, 同じく西墓山古墳では刀・剣・ヤリ約 200 が出土している。

それぞれの事例に対する説明が十分ではないが、甲冑を含む武器が副葬されている古墳は、少なくとも三つの型に区分できるものと考えられる。大多数を占める甲冑 1 に対して複数の刀剣、ヤリや鉾などの長柄の武器、数群までの鉄鏃を中心とした型、野中古墳にみられるように多数の甲冑とそれぞれに帰属する単数の刀剣を基本とする型、そして、西小山古墳にみられるように、個人使用の範囲を越えた複数の甲冑や多量の攻撃用武器を副葬する型である。さらに、条件は異なるが、多量の攻撃用武器を埋納する型がある。拙稿では、



第 2 図 野中古墳遺物出土状況 (報告書野中古墳 一部改変)

それぞれの武器の副葬・埋納状況の典型とした古墳の名称を採って「大塚古墳型」・「野中古墳型」・「西小山古墳型」・「西墓山古墳型」とした。むろん、甲冑を含まない古墳が数多く存在しているわけであるが、論旨の混乱を避けるため、小論では検討の対象としない。

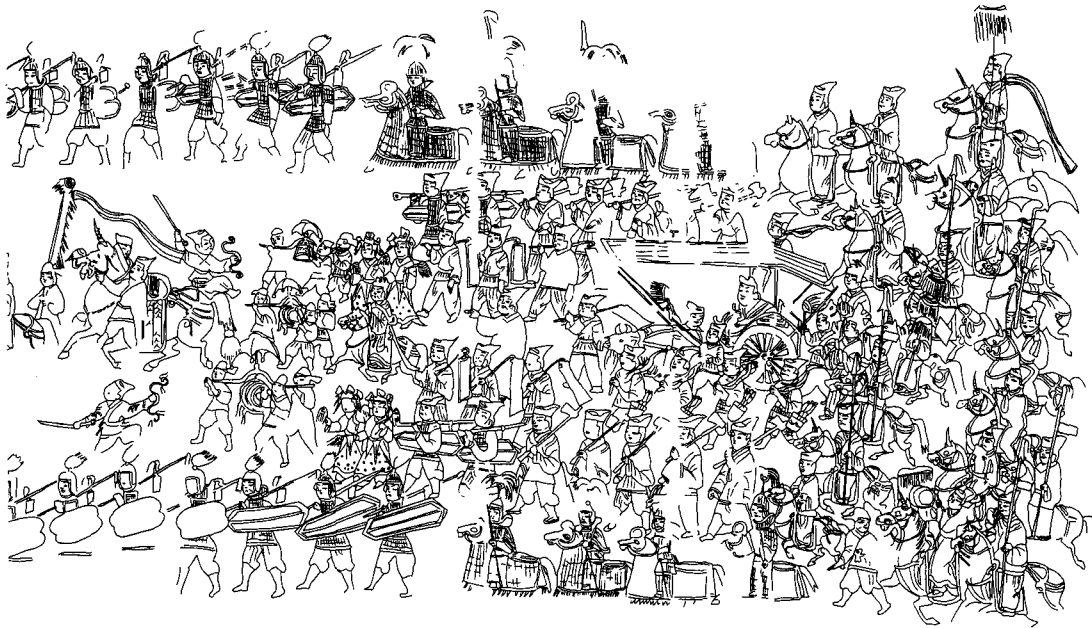
ここで、「野中古墳型」の状況について少し補足しておきたい。たとえば、黒姫山古墳では、前方部竪穴式石室以外に後円部の主体部に別に甲冑が副葬されていたことが知られており、本来古墳被葬者が装着する甲冑が主たる埋葬施設に別に副葬されている。また、野中古墳の場合には「大型主墳」である墓山古墳が存在する。つまり、「野中古墳型」の古墳で認められる武器は、古墳の被葬者と別の人々が使用することを前提にした武器であったことを示している〔北野1976〕。

さらに、「野中古墳型」と「西墓山古墳型」の出土状況の違いが重要な手がかりを与えてくれる。「野中古墳型」では、甲冑1にそれぞれ特定の刀剣1が帰属する、ないしは甲冑と同数の刀剣が存在しており、これらの武器が何らかの事情によって事前にセットとして抽出されていたことを示している。また、野中古墳では報告者である北野耕平氏がとくに注目されている、甲冑11のうち三角板革綴襟付短甲・革製冑3にそれぞれ剣1が付随し、他は刀が付随している点も、何らかの事前の事情に拠ったことを示唆している〔北野1976〕。一方、「西墓山古墳型」では、多量の攻撃用武器が一括して埋納されている。両者の違いは、「野中古墳型」は、これらの武器で武装する特定の集団がすでに存在することを前提にしているのに対して、「西墓山古墳型」は、そのような特定の使用者の存在を前提にしていないことである。むろん、この考えに異論がないわけではない。これらの大量の武器は、古墳の被葬者に供献されたものという見解である〔北野1976、都出1995、山田1997〕。ここでは、古墳に副葬・埋納された物品が当時の所有・管理形態を反映したものであるという前提によって、この見解は採らない。なお、論旨が煩雑になるが、野中古墳は、常備軍が装備した武器組成を反映する「野中古墳型」(第1～3列)と緊急時に編成される組織に貸与する目的をもった武器の備蓄を反映する「西墓山古墳型」(第4・5列)が併存したものと考えている〔田中2003a〕。

以上の内容を整理してみると、一般に甲冑を副葬する「大塚古墳型」の古墳では、古墳被葬者を中心とした武装単位としての武器組成を反映し、「野中古墳型」の状況は、戦時、平時を問わず、常時維持されている組織が常備した武器組成を反映し、「西墓山古墳型」の状況は、戦時もしくはそれに類する社会的緊張時に緊急に編成される組織に貸与するために準備された武器の備蓄を反映し、また、「西小山古墳型」は、古墳被葬者を頂点とした武装単位と緊急時に対応できる備蓄を併せつ武器組成で、「野中古墳型」の出現までの過渡的な段階にあるものと考えられる。

野中古墳や黒姫山古墳前方部竪穴式石室に埋納された武器組成は、常時維持された軍事組織、すなわち、常備軍の存在を示すものと考えられる〔田中2001a〕。むろん、それまでも軍事組織と呼べるものが存在していたことを否定するわけではないが、鋌留甲冑が導入される段階には成立するこの常備軍は、武人的な性格を兼ね備えた多くの古墳の被葬者とは別の人たちによって構成されていたと考えられる。

なお、論旨から少し離れるが、第3図に高句麗安岳第3号墳の回廊東壁および北壁に描かれた出行図(部分)を示した。これが小論で想定した常備軍の進んだ姿である。この出行図は、当時の状況を正確に伝えているかという点については異論が出るかもしれないが、古墳被葬者である牛車に



第3図 安岳第3号墳出行図(部分)

(菅谷文則「晋の威儀と武器について」『武器研究』1 2000 中川穂花氏製図より 一部改変)

乗った主人公を中心に、250人以上の歩兵・騎兵・鼓吹隊などから構成された隊列の様子を描いたものである。この図で注目したい部分は、鼓吹隊を先頭に、一騎の騎兵、これに続いて左右に同数の節や幡などを携えた歩兵、挂甲を装着して盾と鉞・盾と環頭大刀で武装した歩兵、斧鉞と弓でそれぞれ武装した歩兵、さらに、その外側に挂甲を装着し長い鉞を持った重装騎兵が配された部隊構成である〔岡崎1964〕。異なる装備で武装した定数の兵士たちの隊列は、この部隊が採る戦術または戦闘方法によって生まれたものとする。すなわち、鼓吹隊を介した指揮命令系統のもとで展開する、恒常的な軍事訓練を受けた親衛としての常備軍の存在を示していると考えられる。むしろ、野中古墳や黒姫山古墳前方部堅穴式石室での武器の出土状況からは、ここまで進んだ軍事組織の存在を推定することはできないが、具体的なイメージの一つとして参照していただきたい。

常備軍は、対象とした事例からすると、当時としては、百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団にのみ認められる組織であり、その集団の中核を占めた人物もしくは組織の下に編成され、その意図と防衛を目的として展開する直属の軍事組織であったと考える。

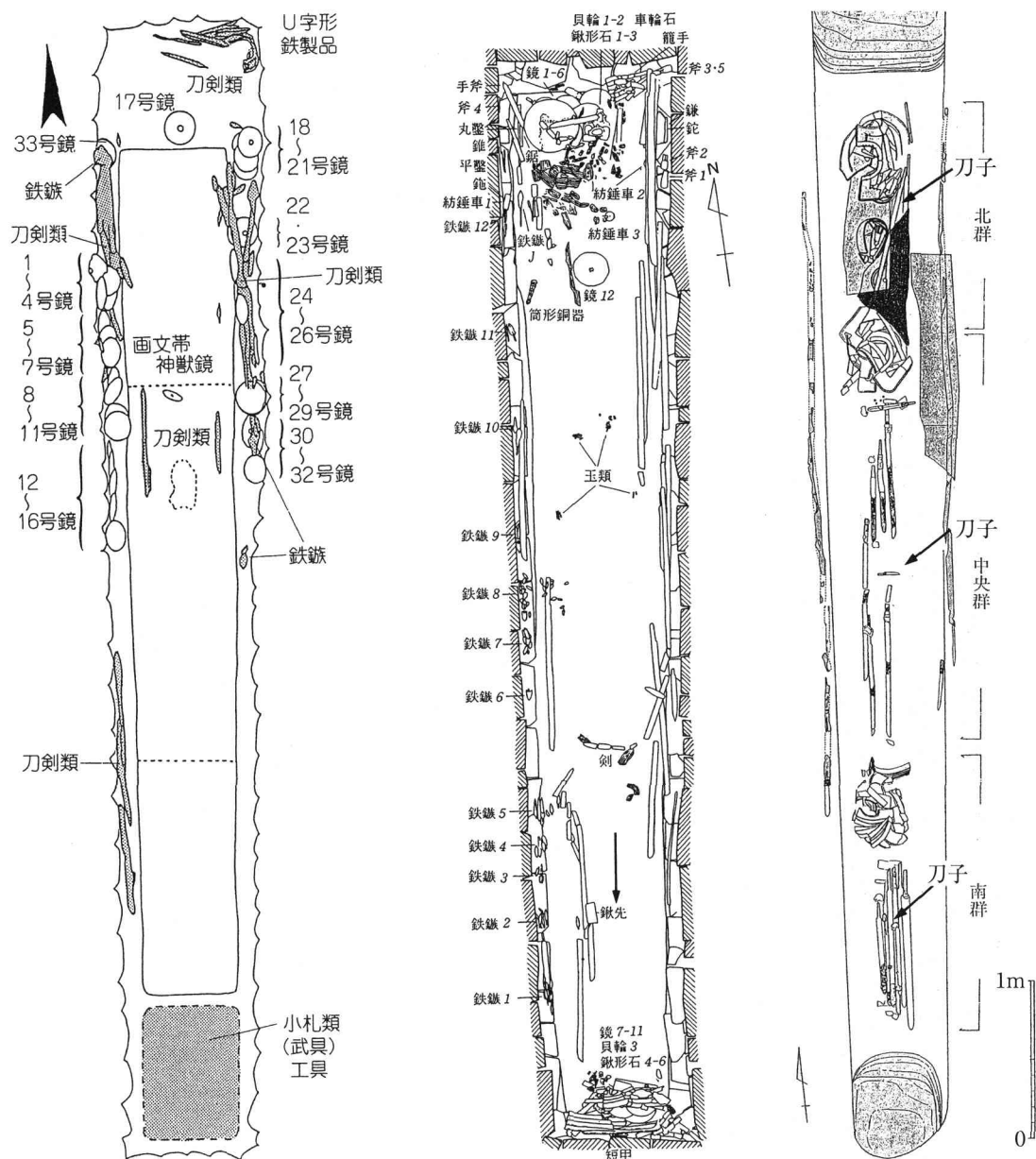
③……………武器の副葬に特化した古墳の出現

つぎに、中期における軍事組織の編成目的について、特定の古墳で農工具を組み込んだ新たな武器組成が出現することと、豪族居館や大型倉庫群などに付帯する防御施設のあり方から検討してみたい。

さて、現在のところ、畿内およびその周辺地域では、大塚古墳第2主体部東部が、農工具が組み込まれた武器組成をもつ古墳としてもっとも時期が遡る事例であると考えられる。既述したように、大

塚古墳第2主体部東槨では、3単位の武器組成にそれぞれ刀子1が含まれている。刀子だけではあ
るが、これは一般にいう工具ではなく、武器組成に組み込まれた工具であると考え。ところが、
西槨では東槨と異なり、多様な農工具が武器から分離され一括して副葬されていた。

ところで、黒塚古墳以降、前期の有力古墳では、副葬品それぞれの大きさや数量によることもあ
るかもしれないが、主要な武器は棺内外の長側部分に、一方農工具は小口部分付近にそれぞれま
まりをもって分離して副葬されていることが一般的である [寺沢1979]。このような出土状況は、



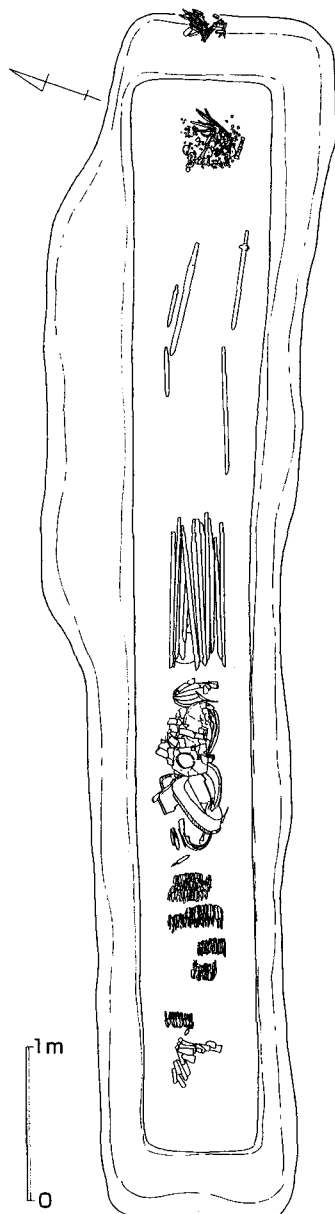
第4図 黒塚古墳遺物出土状況模式図
(報告書黒塚古墳)

第5図 紫金山古墳遺物出土状況
(報告書紫金山古墳)

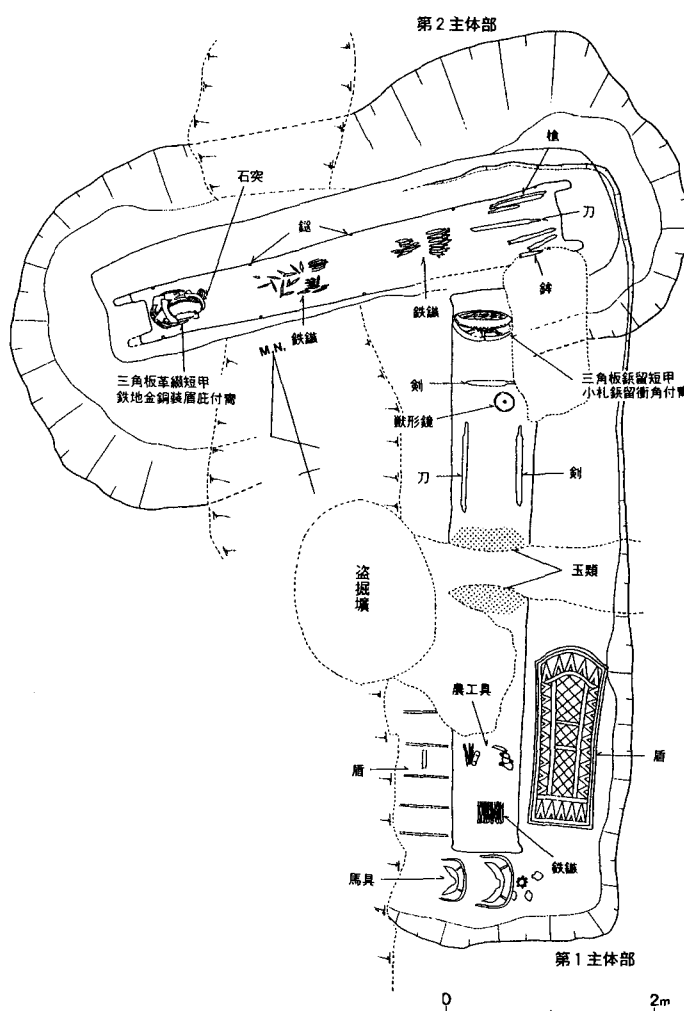
第6図 大塚古墳第2主
体部東槨遺物出
土状況(報告書大
塚古墳 一部改変)

第2表 桜塚古墳群東群武器・馬具・農工具の構成一覧

| 古墳名 | 主体部 | 短甲 | 挂甲 | 冑 | 刀 | 剣 | ヤリ | 鉾 | 石突 | 弓 | 鉄鏃 | 盾 | 馬具 | 鍬先 | 鎌 | 手鎌 | 斧 | 鉈 | 刀子 | 鑿 | 錐 | その他 |
|-----------|-------------|----|----|---|----|----|----|---|----|---|------|---|----|-----|-----|----|----|-------|-----|-----|----|-------|
| 大塚古墳第2主体部 | 西塚(粘土槨) | ● | | ● | 3+ | 1+ | | | | 2 | 28+ | 2 | | 10+ | 20+ | 7+ | 10 | (20+) | 15+ | 20+ | 2+ | |
| | 東塚(粘土槨) | 3 | | 2 | 10 | 8 | 3 | | | | | 2 | | | | | | | | 3 | | 鏡・櫛 |
| 御獅子塚古墳 | 第1主体部(粘土槨) | 1 | | 1 | 1 | 2 | | | | | 30 | 1 | ● | 1 | 2 | | 2 | 2 | | | | 鏡・玉類 |
| | 第2主体部(箱形木槨) | 1 | | 1 | 1 | 3 | | 4 | 1 | | 170+ | | | | | | | | | | | |
| 狐塚古墳 | 西側(粘土槨) | 1 | | 1 | 2 | 3 | | ● | | | | ● | 2 | ● | 1 | 2 | | 2 | 2+ | | | 鏡・櫛 |
| | 東側(粘土槨) | | | | 1 | 1 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 鏡 |
| 南天平塚古墳 | 第1号棺(刺竹形木槨) | 1 | | | 3 | | ● | | | 3 | ● | | ● | | | | | ● | | ● | | 鏡・三環鈴 |
| | 第2号棺(刺竹形木槨) | 2 | | 1 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | | | | | ● | | | 鏡 |
| 北天平塚古墳 | 第1号(粘土槨) | 1 | 1 | | 3 | | | | | | ● | | | | | | | | | | | |
| | 第2号(粘土槨) | 5 | | 2 | 3 | | | 2 | | | ● | 5 | ● | | | | | | ● | ● | | |



第7図 盾塚古墳遺物出土状況 (報告書盾塚古墳一部改変)



第8図 御獅子塚古墳遺物出土状況 (報告書御獅子塚古墳)

両者の使用用途の違いが認識されていたことを示している。

ただし、大阪府紫金山古墳のように、多種多様な農工具が石室北小口にまとめて副葬されていたにもかかわらず、鍬先のみが石室南側で刀剣類とともに出土している事例がある。また、雪野山古墳やマエ塚古墳などでは刀子だけが刀剣とともに出土している。このような例外的な事例も存在するが、前期の畿内およびその周辺地域では、武器組成に組み込まれた農工具の存在は必ずしも明確ではない。だからといって、武器とともに使用される農工具の存在を否定するものではない。むしろ、必要に応じて武器とともに農工具が携行されたことであろう。ただし、中期の一部の古墳にみられるような、常時維持された武器組成として存在していなかったことを示すものであると考える。

ところが、中期に入り鋌留甲冑が導入されるころを境に、武器の副葬が卓越した一部の古墳で、大塚古墳第2主体部東榔のような状況が顕著にみられるようになる。たとえば、古市古墳群でも盾塚古墳では、農工具は武器から分離一括して副葬されていたが、つぎの鞍塚古墳の段階では武器組成に組み込まれていたと考えられる提碁がみられる⁽⁹⁾。また、既述した西小山古墳では、甲冑を含む多量の武器や馬具が副葬されながら、滑石製勾玉16と刀に付随する刀子、出土位置は特定できないが鎌と鉞が存在するのみである。同様の状況が滋賀県新開1号墳でもみられる。南遺構では、棺内から冑5・短甲4とその付属具・刀5・剣7・鉞1・鉄鏃73というまとまった武器と鉞3・刀子1・鏃1が副葬され、刀子は甲冑や剣とともに、鏃・鉞は甲冑の西側で鉄鏃とともに出土している。北遺構では甲冑は副葬されていないが、棺内で鏡・玉類・櫛などとともに刀2・剣3・刀子2、棺外で刀1と滑石製小玉、出土位置は不明であるが農工具は刀子2のみである。このように組成として整った武器とともに少量の農工具が出土する状況は、奈良県ベンシヨ塚古墳第2埋葬施設や大阪府土保山古墳・兵庫県法花堂2号墳をはじめ、一定数の古墳でみられる。とくに、ベンシヨ塚古墳第2埋葬主体では、斧・鏃が短甲に中に入れられた状態で出土している。奈良県後出2号墳でも短甲の中に鉞・鉄鏃とともに鎌1・斧2・鏃1が入れられており、その用途を示唆する事例として興味深い。このような古墳における農工具の出土状況は、農工具が武器組成の中に組み込まれていたことを示していると考えられる〔田中2003a〕。

また、常備軍の存在を想定した野中古墳では、第2列に配された農工具が、第1列から第3列に置かれた甲冑11・刀剣12・鉄鏃12群に含まれるものと判断し、本来これらの武器とともに一括されていたものと考えたい。なお、既述したように、第4列と第5列にあった他の農工具は、野中古墳における「西墓山古墳型」として分類した多量の刀剣を主体とした部分にもなっていた可能性が高く、西墓山古墳やアリ山古墳北施設での状況と共通するものであったと考える⁽¹⁰⁾。

ところが、武器組成に組み込まれたと考えている農工具は、すべての古墳で種類や数量が同一というわけではない。しかし、農工具は、鎌・斧・鉞・刀子が主体を占め、これに鍬先、鏃が続き、鉞は野中古墳第3列のみで、手鎌の存在が確認できないという傾向は抽出できる。手鎌については、古墳の築造時期との関係によるものかもしれないが、武器組成に組み込まれた農工具をある程度絞り込むことができるもの⁽¹¹⁾と考える。

このように農工具の種類や数量に一定の規則性が見出せないことは、当時の軍事組織の未成熟さを示していると考えられることもひとつであろう。また、見方を変えれば、武器の副葬が卓越する古墳被葬者が、定型化した甲冑という形状および機能がある程度統一された防御用武器をもちながら、

所持する攻撃用武器の組成や形状が統一されていないことに通じるかもしれない。むしろ、農工具が組み込まれた武器組成をもった古墳被葬者が限られたものであったと考えるべきである。また、農工具が組み込まれた武器組成は、一定数の動員を可能とする古墳被葬者の武装形態であったと考えたい。

ところが、既述したように、大塚古墳第2主体部西柳では、前期でみられたように、農工具が武器から分離一括された状態で出土している。このような出土状況は、大阪府交野東車塚古墳・同和泉黄金塚古墳東柳・京都府宇治二子山古墳北墳・和歌山県大谷古墳などでもみられ、一方で農工具が武器から分離一括された副葬が継続して行われていることを示している。中期の早い段階では大塚古墳第2主体部東柳のような事例もあるが、多くは前期以来の副葬形態を踏襲していたといえる。ところが、鋌留甲冑の導入がはじまるころを境に、武器の副葬が卓越するないしは武器の副葬に特化した古墳の多くでは、少量の農工具が武器とともに副葬される事例が増加し、中には御獅子塚古墳第2主体部や兵庫県亀山古墳のように農工具を含まない副葬品構成もみられるようになる。

農工具を組み込んだ武器組成は、武器の供給の中核を担った古市古墳群に含まれる古墳ばかりではなく、桜塚古墳群東群のようにこれに先行するものも含め、奈良県帯解古墳群や滋賀県安養寺古墳群など、武器の副葬が卓越する新興中小規模古墳群へ波及する一方で、淡輪古墳群西小山古墳などにみられるように他の大型古墳群中に含まれる古墳、また、定型化した甲冑を含む卓越した武器が副葬された一部の古墳の被葬者にも採用されている。しかし、大谷古墳などのように、中期後半段階の首長墳では、卓越した武器とともに、依然として一定の種類と数量の農工具が武器から分離一括された状態で副葬されている。つまり、農工具を組み込んだ武器組成の出現とその広がり、それぞれの地域、または、それぞれの古墳被葬者が担った役割の違いによって顕在化した現象であると考えたい。

ところで、近年各地で豪族居館ないしはそれに類する遺跡の検出が相次いでいる。日本列島で豪族居館として考えられている施設、また、大阪府法円坂建物群や和歌山県鳴滝遺跡などでみられる倉庫群跡などでは、発掘調査の範囲が十分でないということもあるが、強固な防御施設の痕跡が検出されていない。濠や塀の存在が確認されている場合でも、それらが設置当初のものであって、その後の拡張や改修の跡がみられないという状況が共通して認められる。さらに、その存続期間が短く、一代一施設といったことも指摘されている。むしろ、中期でも時期が下る群馬県三ツ寺I遺跡のように、長期間存続し、濠の幅が30~40m、その深さが4mといった他に比較して大規模な濠や柵列、また、台形の張出部などをもつ施設も確認されている。柵列については改築が行われているとのことであるが、重大な軍事的対峙を示すような大規模な拡張や改修の痕跡はみられない。つまり、これら豪族居館といわれるものに付設された防御施設の多くが設置当初の姿を保ち、また、特定の時期、地域において共通した防御施設の拡充などの現象がみられない[古代武器研究会討論2002]。このことは、これらの防御施設の付設が、広範な地域での高い社会的緊張状況に起因したものであることを示している。

さらに、現在のところ、領域境界に城塞などの防塞施設が確認されていないことも同様の状況を反映した現象であると考えられる。古墳時代では、領域境界がどの程度確定していたか、また、認識されていたかという問題もあるが、少なくとも、重大な軍事的対峙が継続したような状況が想定でき

ないことは重要である。なによりも、定型化した甲冑のように統一された形状および機能をもった武器の共有は、これが百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団による供給によって生じたものとすれば、それぞれの地域間に軍事的な衝突が想定されるような厳しい対立状況になかったことを示しているともいえる。

④……………古墳時代前期後半から中期における軍事組織の特質

前期後半、一部の小規模古墳で、武器が具体的な軍事活動を想定しないしは必要とした武装形態を単位として副葬されるようになる。とくに方形板革綴短甲に注目すれば、この変化は、前期前半以降の自律的な発展の上に生じたものではなく、朝鮮半島東南部地域の勢力との関係によって新たに生じた現象である⁽¹²⁾と考える。このような関係は、前期以来の既存有力勢力との間に成立したのではなく、この段階で台頭する新興勢力を対象としていたことは極めて重要である。また、このような変化は、特定の新興勢力を武装化させる必要があった、たとえば、朝鮮半島の勢力などの強い意図ないしは要請という事情がその背景にあったのかもしれない。

これにつづき、中期前半以降、西日本を中心に定型化した甲冑を副葬した古墳が急増し、小規模古墳が占める割合が高まりをみせる。より広範な地域のより広い階層にまで定型化した甲冑が浸透することになる。このことは、より多くの人々を統一された形状および機能をもった武器で武装させることを可能にしたといつてよい。つまり、定型化した甲冑が百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団の意図によって供給されたとすれば、この段階に、両古墳群の被葬者集団が軍事組織のもっとも基本的な要件のひとつである同一装備で武装する軍事組織の編成を必要とした状況が生じたことを示している。また、一部の古墳でみられる農工具を組み込んだ武器組成や武器の副葬に特化した古墳の出現は、同時に両古墳群の被葬者集団が移動や駐留を可能とする軍事組織の整備を必要とした課題に直面していたと考えられる。さらにいえば、すでにこのような軍事組織の整備を必要とした経験を経たことによって生み出されたものかもしれない。現状では明確な論拠を示すことができないが、これらに付帯して補給物資の確保や輸送手段の整備も行われたことであろう。

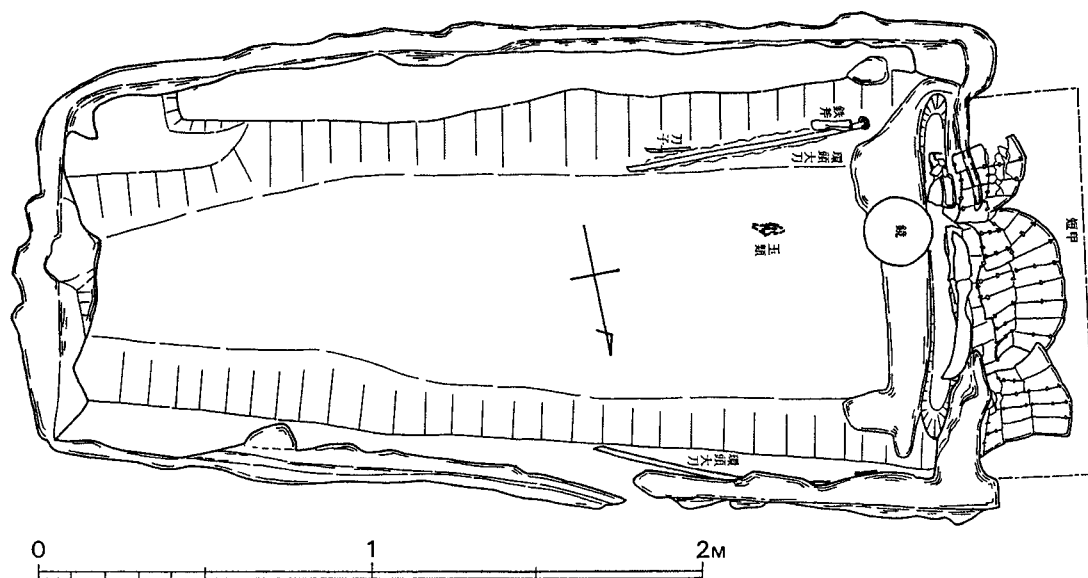
さらに、畿内およびその周辺地域の主導勢力としての地位を確立した百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団のもとに、常備軍が成立したと推定する。この常備軍は、武人的な性格をもった古墳被葬者によって編成される軍事組織とは別に、両古墳群の被葬者集団の中核を占めた人物もしくは組織のもとに、人格的忠誠関係に基づいた軍事組織として存在したものと考える。常備軍を擁した人物もしくは組織は、両古墳群を構成する多くの古墳被葬者の意志を勘案することなく、自らの権能をより自由に、また、より強力に行使する基盤を整えることになったと考える。

ところで、最新の機能を備えた武器の供給は、供給主体者がその勢力拡張を目指した行為である反面、じつは、供給者の存続にかかわる重大な選択でもある。利害を共有する勢力に最新の機能を備えた武器を供給することは、自らの地位の保全と勢力拡張を図る手段であると同時に、自らが自らを脅かす要因を生み出していることに他ならないからである。武器の供給を受けた各勢力が自らに敵対する勢力に変わる危険性を常にはらんでいると考えなければならない。ここに百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団が最新の機能を備えた武器の供給することができた背景には、各地域の軍事力

を圧倒する軍事組織，すなわち，常備軍の存在があったと考える。むしろ，そのために常備軍を創設したと考えるべきかもしれない。つまり，常備軍は，大規模な軍事組織の編成を保障する装置として創設されたものといえる。現在のところ明確な論拠を示すことができないが，常備軍についても，朝鮮半島から導入されたシステムであった可能性を想定しておきたい。

前期後半から一部の古墳で出現する具体的な軍事活動を想定しないしは必要とした武装形態の単位としての副葬，これにつづく定型化した甲冑を含む組成として整った武器での武装や，移動や駐留に対応できる農工具を組み込んだ武器組成の出現，さらに，常備軍による軍事基盤の強化という一連の流れは，百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団のもとで相互に密接な関係をもちながら推移しているといえる。一方，このような移動や駐留を可能とする武器組成をもちながら，国内では諸勢力間に重大かつ恒常的な軍事的対峙を示す痕跡を見出すことができない。また，朝鮮半島でみられる防御，防塞施設と比較すれば [亀田 2002]，国外からの，たとえば朝鮮半島の諸勢力の侵攻が想定されていた可能性が極めて低いと考えられる。この流れは，それまでの示威や防御，また，突発的で，近距離，短期間の軍事活動を目的とした対国内的な要因への対応とは明らかに異質なものであったことを示している。つまり，これらの一連の流れは，対国外的な要因への対応を可能とする計画的で，長距離，かつ長期間にわたる大規模な軍事活動を目的として整備，拡充されたものであったと考える。さらにいえば，その対象は朝鮮半島を含むあるいはこの地域を主眼としたものであったと理解すべきである。朝鮮半島で出土事例が増加する定型化した甲冑は，両地域に類似する防御用武器が存在することを示しており，当初の製作地がどこであったかという問題をおくとしても，その裏付けの一つとすることができるものとする。

以上に述べたような想定は，限られた資料による牽強附会との批判を受けるかもしれない。しかし，前期後半以降にみられる武器や武器組成，また，その副葬状況は確実に変化している。中期に編成された軍事組織は，朝鮮半島を含むあるいは主眼とし，侵略的な目的や派兵の要請といったよ



第9図 若八幡宮古墳遺物出土状況 (報告書若八幡宮古墳 一部改変)

うな要因によって編成された可能性が高いと考える。

また、小論の主たる対象とはしないが、他の地域の勢力が担った役割についても検討する必要がある。たとえば、前期後半以降の北部九州地域を例にあげれば、福岡県若八幡宮古墳や佐賀県谷口古墳東石室などでは、畿内およびその周辺地域に先駆けて、農工具を組み込み、かつ、具体的な軍事活動を想定したないしは必要とした武装形態の単位としての副葬が出現していたと考える⁽¹³⁾。さらに、畿内およびその周辺地域では武装形態にもとづいた武器の副葬は、タニグチ1号墳のように、まず小規模古墳でみられたのに対して、北部九州地域では勢力の中核を担う首長墳で認められることは重要である。つまり、北部九州地域では、移動や駐留を目的とするないしは可能とする装備をもった軍事組織が、畿内およびその周辺地域に先駆けて稼動していた可能性が高い [田中 2003b]。

ところで、定型化した甲冑の分布に象徴されるように、形状および機能が統一された武器での武装は、百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団の主導のもとに行われたと考える。しかし、定型化した甲冑を含む武器がそれぞれの古墳に副葬されていたことは、両古墳群の被葬者集団が供給したものであっても、一地域首長が供給を受けた武器をさらに下位に分与したことも考えられるが [藤田 1988]—、それらが古墳被葬者の所有に帰していたことを示している。また、北部九州地域などでは畿内およびその周辺地域に先駆けて農工具を組み込んだ武器組成が出現するとはいえ、各地の勢力が独自に軍事的活動を展開するものではなく、百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団の主導によって軍事組織の編成が行われたことを示している。あくまでも当時の政治主体である百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団を介した軍事活動であって、たとえば、各地勢力が個別に朝鮮半島に存在した勢力のもとに組み込まれたような状況にはなかったと考えられることは重要である。つまり、対外的に両古墳群の被葬者集団が軍事活動を行う政治主体として認識されていたことを示していると考えられる。このことは、倭の五王たちが除正を求めた將軍号の正当性を主張する重要な根拠のひとつになったのではなかろうか。日本における古代国家成立過程において、このような外的な認証を得ることは、軍事が果たした重要な役割のひとつであるといえる。むろん、このようなラインに乗らないさまざまな要因による小規模な軍事活動が特定勢力によって行われた可能性を否定しているわけではない。

さて、今回の検討は、古墳時代における軍事が果たした役割について、その一面を検討したに過ぎない。対象を畿内およびその周辺地域に限ったこともあり、これに対応する、とくに、九州地方や関東地方などの状況を具体的に示す必要がある。また、中期における軍事組織の編成が朝鮮半島を含む、あるいは、主眼とした課題に拠ったものと考えた。朝鮮半島における武器組成との比較も今後の重要な課題のひとつである。古墳時代における朝鮮半島との関係については、その要因を鉄の獲得に求める研究は多い [都出 1991 他]。このような研究に導かれ、多角的な視点から日本の古代国家形成過程において軍事が果たした役割を具体的に検討していきたい。今回の検討は、ごく限られた内容ではあるが、現状での整理として提示する。

註

(1)——紙面の関係で先行研究について触れることができなかった。[古谷 1996, 阪口 1998, 田中 2001a] 等を参照願いたい。

(2)——このような視点について松木武彦氏 [松木 1995 他] や豊島直博氏 [豊島 2000] らから疑問視する見解が提示されている。この点については、田中 2001c

を参照願いたい。

(3)——ホケノ山古墳では70を越える銅鏃が副葬されていたが、黒塚古墳では検出されていない。また、一部の古墳で認められる銅鏃の多量副葬や銅鏃と鉄鏃の共伴は、特例的な形状をもつ銅鏃を除くと、鉄鏃と補完関係にあると判断され、銅鏃を実用武器として考える必要があることを示していると考えられる[田中2004]。一方、松木武彦氏のように銅鏃[松木1992]や、時期が下がるが定型化した甲冑[松木1996]を、また、高田貫太氏のように鉾[高田1998]を威信財とする考えがある。

(4)——藤田和尊氏は、方形板革綴短甲のうち一部が朝鮮半島から導入された可能性を指摘されている[藤田1988]。

(5)——高橋克壽氏は、堅矧板革綴短甲から方形板革綴短甲、さらに定型化した甲冑への型式上の連続性を指摘されている[高橋克1993]。また、高橋工・橋本達也・小林謙一氏は国内での製作を想定されている[高橋工1995、橋本1998、小林2002]。

(6)——山田良三氏や柳本照男氏は、筒形銅器は日本で製作されたものとの考えを示されている[山田1999、柳本2000]。

(7)——拙稿[田中2001a]では百舌鳥大塚山古墳が「野中古墳型」になる可能性を想定してきたが、森浩一氏の公演内容[森2003]により、この考えを訂正する。

(8)——農工具が組み込まれた武器組成については、すでに関川尚功氏の指摘がある[関川1987]。藤原学氏による野中古墳を対象とした同様の指摘[藤原1992]、

また、これに関連する入江文敏氏や門田誠一氏による提砥(佩砥)の研究がある[入江1998、門田2001]。

一方、豊島直博氏の指摘に従えば、桜塚古墳群東群における武器と農工具の推移は、武器が重要な位置を占めるような葬送儀礼を反映したと考えることになる[豊島1999]。

(9)——また、盾塚古墳・鞍塚古墳・珠金塚古墳の農工具を中心に検討された卜部行弘氏のように、これらの農工具を生産用具とする見解が一方に存在する[卜部1991]。

(10)——この点が藤原学氏の考え[藤原1992]との違いである。

(11)——韓国九宜洞堡壘などでの出土品構成は、小論の想定にとって示唆的な内容をもつものとする[崔2001]。

(12)——今回の検討では、具体的な資料が朝鮮半島東南部地域に限られているが、この地域以外の勢力との関係も視野に入れておく必要がある。

(13)——若八幡宮古墳では、棺内南側で環頭大刀1・刀子1・斧1、可能性として盾、棺外北側で環頭大刀1・剣1・鉄鏃19・鉾1というように武器と農工具が一括して副葬されていた。また、棺外西側小口部分に方形板革綴短甲が置かれていた。谷口古墳東石室では、後円部東石室で長持形石棺内から鏡・玉類・石剣・剣1、棺外西側で一括して剣1・刀10以上・鉄鏃多数・斧1の出土が伝えられている。一方、北部九州地域の農工具のあり方については、すでに寺沢知子氏の研究がある[寺沢1979]。

引用文献

- 入江文敏 1998 「佩提考—日韓出土資料の検討—」『網干善教先生古稀記念考古学論集』上巻
 卜部行弘 1991 「盾塚・鞍塚・珠金塚古墳の農・工具」『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』末永雅雄編
 岡村秀典 1999 『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館
 亀田修一 2002 「朝鮮時代の古代山城の見方」『韓半島考古学論叢』
 北野耕平 1976 「河内野中古墳の研究」大阪大学文学部国史研究室報告第2冊
 古代武器研究会 2002 「討論」『古代武器研究』3
 小林謙一 2002 「古墳時代甲冑の系譜と木甲」『文化財論叢』Ⅲ 独立行政法人文化財研究所
 崔鐘澤 2001 「5～6世紀高句麗の武器と馬具」『古代武器研究』2
 阪口英毅 1998 「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲」『史林』第81巻第5号
 西藤清秀他 1996 『タニグチ古墳群発掘調査報告』高取町文化財調査報告書第17冊 高取町教育委員会
 清水和明 1996 「東アジアの小札甲の展開」『古代文化』第48巻第4号
 下向井龍彦 1987 「日本律令軍制の基本構造」『史学研究』175
 申敬澈 1993 「加耶成立前後の諸問題」『伽耶と古代の東アジア』新人物往来社
 関川尚功 1987 「畿内中期古墳出土の鉄製農具について」『横田健一先生古稀記念文化史論叢』上
 高田貫太 1998 「古墳副葬鉄鉾の性格」『考古学研究』第45巻第1号

- 高橋克壽 1993 「4世紀における短甲の変化」『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館
高橋 工 1995 「東アジアにおける甲冑の系譜について」『日本考古学』第2号
田中晋作 1995 「古墳時代中期における武装組織について」『考古学研究』第41巻第4号
—— 1998 「筒形銅器について」『網干善教先生古稀記念考古学論集』上巻
—— 2000 「巴形銅器について」『古代学研究』151号
—— 2001a 『百舌鳥・古市古墳群の研究』学生社
—— 2001b 「古墳時代における鉄製甲冑の出現」『季刊考古学』76 雄山閣出版
—— 2001c 「古墳時代中期における武器の副葬・埋納に関する理解をめぐって」『古代学研究』155
—— 2002 「鉄製武器・武具」『日本考古学協会2002年度榎原大会研究発表資料集』日本考古学協会2002年度榎原大会実行委員会
—— 2003a 「古墳に副葬された武器組成の変化について」『日本考古学』第15号
—— 2003b 「古墳時代における武器組成の変化について(2)―北部九州沿岸地域を中心に―」『古代武器研究』4
—— 2004 「銅鏃について」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』
都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」『日本史研究』343
—— 1995 「研究報告についての討議」『考古学研究』第42巻第3号
鄭澄元・洪潜植 2000 「筒形銅器研究」『福岡大学総合研究所報』第240号
豊島直博 1999 「古墳時代における軍事組織の形成」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
—— 2000 「鉄器埋納施設の性格」『考古学研究』第46巻第4号
寺沢知子 1979 「鉄製農具副葬の意義」『榎原考古学研究所論集』4
橋本達也 1998 「堅矧板・方形板革綴短甲の技術と系譜」『青丘学術論集』第12集 韓国文化研究振興財団
福永伸哉 1998 「対半島交渉からみた古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』第12集 韓国文化研究振興財団
藤田和尊 1988 「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『榎原考古学研究所論集』第8 吉川弘文館
藤原 学 1992 「須恵器生産の展開」『新版古代の日本』5 近畿地方1 角川書店
古谷 毅 1996 「古墳時代甲冑研究の方法と課題」『考古学雑誌』第81巻第4号
松木武彦 1992 「銅鏃の終焉―長方寺南原古墳出土の銅鏃をめぐって―」『大阪大学文学部考古学研究报告』第2冊 大阪大学南原古墳調査団
—— 1995 「古墳時代の武器・武具および軍事組織研究の動向」『展望考古学』
—— 1996 「日本列島の国家形成」植木武編著『国家の形成』三一書房
—— 1999 「古墳時代の武装と戦闘」松木武彦・宇田川武久編『人類にとって戦いとは2―戦いのシステムと対外戦略―』東洋書林
森 浩一 2003 「平成13年度秋期特別展記念講演会録『失われた時を求めて―百舌鳥大塚山古墳の調査を回顧して―』」『堺市博物館報』第22号 堺市博物館
門田誠一 2001 「2古墳出土の提砥―近年の韓国出土資料との対象による若干の視点―」『團部ヶヶ前古墳群発掘調査報告書』佛教大学校地調査委員会
柳本照男 2001 「金海大成洞古墳群出土の係系遺物について」『久保和士君追悼考古論文集』
山田幸弘 1997 「出土鉄器の検討」『西墓山古墳―古市古墳群の調査研究Ⅲ―』藤井寺市文化財調査報告書第11集 藤井寺市教育委員会
山田良三 1999 「筒形銅器の再検討」『榎原考古学研究所紀要考古学論叢』第23冊 奈良県立榎原考古学研究所

(報告書典拠)

- 尼塚古墳 山田良三 1969 「尼塚古墳群発掘調査」『立命館史学』第289号
有明山將軍塚古墳 更埴市教育委員会 2002 『更埴市内前方後円墳範囲確認調査報告書―有明山將軍塚古墳・倉科將軍塚古墳―』
アリ山古墳 北野耕平 1964 「野中アリ山古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室報告 第1冊
池ノ内5号墳 菅谷文則他 1973 「磐余・池ノ内古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第28冊 奈良県教育委員会
石塚山古墳 橋本達也他 1996 『豊前石塚山古墳』荻田町・かんだ郷土史研究会
石山古墳 京都大学文学部博物館 1993 『紫金山古墳と石山古墳』

- 和泉黄金塚古墳 末永雅雄他 1954 『和泉黄金塚古墳』 綜芸舎
 上殿古墳 伊達宗泰 1966 「和爾上殿古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第23冊 奈良県教育委員会
- 後出2号墳 松永博明 1986 「後出古墳群」『宇陀地方の遺跡調査 昭和60年度』『奈良県遺跡調査概報』1985年度 奈良県立橿原考古学研究所
- 宇治二子山古墳 杉山宏他 1991 『宇治二子山古墳』 宇治市教育委員会
 大谷古墳 京都大学文学部考古学研究室 1959 『大谷古墳』 和歌山市教育委員会
 大塚古墳 柳本照男編 1987 『摂津豊中大塚古墳』 豊中市教育委員会
 御獅子塚古墳 豊中市教育委員会 1989 『御獅子塚古墳』
 交野東車塚古墳 奥野和夫他 2000 『東車塚古墳(調査編)』 交野市教育委員会
 亀山古墳 梅原末治 1932 「播磨加西郡亀山の古墳とその遺物」『考古学論叢』第14輯
 梅原末治 1939 「在田村亀山古墳と其の遺物」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第4輯 兵庫県
- 鴨都波1号墳 御所市教育委員会編 2001 『鴨都波1号墳調査概報』 学生社
 瓦谷1号墳 石井清司他 1997 「瓦谷古墳群」『京都府遺跡調査報告書』第23冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 久津川車塚古墳 梅原末治 1920 『久津川車塚古墳研究』
 古谷 毅 1988 「京都府久津川車塚古墳出土の甲冑」『MUSEUM』445号
- 鞍塚古墳 末永雅雄編 1991 『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』
 黒塚古墳 奈良県立橿原考古学研究所 1998 『黒塚古墳』 学生社
 黒姫山古墳 末永雅雄・森浩一 1953 「河内黒姫山古墳の研究」『大阪府文化財調査報告』第1輯 大阪府教育委員会
- 紫金山古墳 小林行雄 1962 「紫金山古墳」『大阪府の文化財』大阪府教育委員会
 京都大学文学部博物館 1993 『紫金山古墳と石山古墳』
- 七観古墳 末永雅雄 1933 「七観古墳とその遺物」『考古学雑誌』第23巻第5号
 樋口隆康他 1961 「和泉国七観古墳調査報告」『古代学研究』27号
 京都大学総合博物館 1997 「王者の武装—5世紀の金工技術—」
- 城山2号墳 白石太一郎 1974 「城山第2号墳」『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊 奈良県教育委員会
- 新開1号墳 西田弘・鈴木博司 1961 「栗東町安養寺古墳群発掘調査報告」『滋賀県史跡調査報告』第12冊 滋賀県教育委員会
- 盾塚古墳 末永雅雄編 1991 『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』
 谷口古墳 梅原末治 1948 「肥前玉島村谷口の古墳」『佐賀県文化財調査報告書』第2輯 佐賀県教育委員会
- タニグチ1号墳 西藤清秀他 1996 「タニグチ古墳群発掘調査報告」高取町文化財調査報告書第17冊 高取町教育委員会
- 椿井大塚山古墳 京都大学文学部博物館 1989 『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』
 山城町 1998 「昭和28年椿井大塚山古墳発掘調査報告」
- 東大寺山古墳 金関 恕 1962 「東大寺山古墳の発掘調査」『大和文化研究』第7巻第11号
 土保山古墳 陳 顕明 1960 『土保山古墳発掘概報』高槻叢書第14集 高槻市教育委員会
 小林行雄 1962 「土保山古墳の調査」『大阪府の文化財』大阪府教育委員会
- 鳴滝遺跡 武内雅人他 1983 「和歌山市善明寺所在鳴滝遺跡発掘調査概報」和歌山県教育委員会
 西小山古墳 末永雅雄 1932 「淡輪村西小山古墳とその遺物」『大阪府下に於ける主要な古墳墓の調査(其の1)』『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』第3輯
- 西墓山古墳 山田幸弘他 1997 「西墓山古墳—古市古墳群の調査研究報告Ⅲ—」藤井寺市文化財調査報告第16集 藤井寺市教育委員会
- 西求女塚古墳 神戸市教育委員会 1995 『西求女塚古墳—第5次・第7次発掘調査概報』
 野中古墳 北野耕平 1976 『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室報告 第2冊
 ベンショ塚古墳 森下浩行 1991 「ベンショ塚古墳の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成2年度 奈良市教育委員会
- 法円坂遺跡 南 秀雄 1989 「難波宮で見つかった古墳時代の大型建物群について」『ヒストリア』第124

号他

- ホケノ山古墳 奈良県立橿原考古学研究所編 2001 『ホケノ山古墳調査概報』 学生社
法花堂2号墳 松本正信・加藤史郎 1986 『法花堂2号墳』 香寺町文化財調査報告Ⅰ
マエ塚古墳 小島俊次 1969 『マエ塚古墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第24冊 奈良県教育委員会
- 三ツ寺Ⅰ遺跡 (跡群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 『三ツ寺Ⅰ遺跡』
メスリ山古墳 伊達宗泰他 1977 『メスリ山古墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊 奈良県教育委員会
- 元稲荷古墳 西谷真治 1964 『向日町元稲荷古墳』『京都府文化財調査報告』第24冊 別刷 京都府教育委員会
- 雪野山古墳 雪野山古墳発掘調査団 1996 『雪野山古墳の研究』
若八幡宮古墳 柳田康雄他 1971 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会

(池田市立歴史民俗資料館)

(2003年5月7日受理, 2003年7月18日審査終了)

고분 시대의 군사 조직에 대해서

田中晋作

이번 심포지움에서 주어진 과제는 고분시대의 군사 조직에 대해서이다. 이 논문의 목적은 이 과제에 대해서 지금까지 제시해 온 원고를 중심으로 특히 고분시대의 전기 후반에서 중기를 대상으로 ① 고분시대의 전기 후반 이후에 보여진 군사 목적의 변화 ②중기 전반에는 百舌鳥·古市古墳群의 피장자(被葬者) 집단에 의한 常備軍 편성의 가능성, ③중기에 있어서의 군사 조직의 편성 목적에 대해서 검토한 내 의견을 보고하는 것이다.

전기 후반에서는, 지금까지 유력 고분에서 볼 수 있었던 示威나 防衛를 목적으로 한 무기의 副葬狀況이 일부의 특정 古墳에서는 구체적인 武裝 형태를 반영한 副葬狀況으로 변화한다. 이 변화는 기존 유력 古墳群에서 볼 수있었던 것이 아니라 이 단계에서는 조선 반도 동남부 지역의 세력과 그 때까지 새로운 관계를 맺어온 신흥 세력중에서 나타난다.

중기에서는 百舌鳥·古市古墳群의 피장자 집단에 의한 기능 및 形狀이 통일된 무기의 공급이 시작되어 대규모의 군사 동원을 가능하게 한 기반이 형성된다. 이 군사 조직을 보장하기 위해서 양고분군의 피장자 집단의 특정인물, 혹은 조직 아래에 인격적 충성관계에 근거한 상비군이 편성되었다.

그리고 무기의 부장이 탁월한 일부 고분에서는 이동이나 駐留가 가능한 농기구를 장비한 새로운 무기 조성이 나타난다. 이러한 무기 조성은 국내에 중대한 군사적 對峙의 흔적을 찾아 볼 수 없으므로 계획적이고 원거리, 장기간의 군사 활동에 대응한 군사조직의 편성이 행해졌다는 것을 나타낸다.

위 검토 결과에 의하면 고분시대 전기 후반 이후에 보여진 군사 조직의 편성은 정치 주체가 군사력 행사에 의해 해결을 필요로 했던 과제가 그 때까지의 대국내적 요인에서 한반도를 중심으로한 대국외적인 요인으로 변화한 것을 나타내고 있다고 생각된다.

The Archaeological Analysis of Military Organization in the Kofun Period

TANAKA, Shinsaku

The given theme in this symposium is the archaeological analysis of military organization in the kofun period. The aim of my article is to investigate 3 points of analysis from the latter half of first period to the middle period of the kofun era. The first point is the evolution of change of the organization and function of the military since the latter half of the first period. The second point of analysis concerns the ability to establish a standard army in the first half of the middle period by the developing political power whose members were later buried during in the Mozu-Furuichi cluster of mound tombs. The final point is the aim of organization in the middle period.

In the latter half of the first period, the change in the burial procedure of weapons in tombs reflects the change in the aim and purpose of the demonstration of power and use of defense. This influence was also reflected in the condition of the armament itself. At that time, this change was brought about by newly-risen groups connecting with other groups located in the south-east region of the Korean peninsula.

During the middle period the foundation for the large scale mobilization of armies was established through the supply of similarity equipped weapons. These were unified in function and form and supplied by the Mozu-Furuichi group. The standard army was controlled by the presiding organization or chief of this group and bound by a pledge of allegiance. The standard army would then guarantee the stability of the military organization.

Further, a new composition of weapons included farm implements used in the transferring and stationing of armies appeared in some tombs which surpassed previously buried weapons. This composition of weapons indicates the existence of a military organization that has the ability for deliberate, long-distance and long-prolonged military action, if the circumstance at a given time did not include a serious military confrontation in the country.

Through these investigations I hope to present the following conclusion. The focus of the military organization that was established since the latter half of the first period in the kofun era changed from internal to external, mainly regarding the Korean peninsula.